

ヒガンバナの開花調節

河野 清 人

全国至るところに見られるヒガンバナは、首飾りや聴診器、提灯などに見たてて古くから子供達の草花遊びの対象とされてきた。本園で毎年12月に実施している草花遊び展に、このヒガンバナの開花株を展示する目的で、開花抑制処理を行った。1982年の予備実験の結果に基づき、1984年に一部改変した処理を実施した結果、目的どおり展示期間に合わせ開花させることができたので報告する。

材料及び方法

ヒガンバナ開花見込み球根70球を供試し、1区各10球ずつとし、処理期間の長さの違いにより7区を設けた。無処理区(対照区)は6月19日に掘り上げた球根を5球ずつ8号鉢に植え付け、戸外管理とした。処理は球根を湿らせた水苔で包み、ビニール袋に入れ、5°Cの低温室に入れて行った。処理期間は7週間から12週間(第1~6区)とした。処理終了球は低温室から搬出後ただちに5球ずつ8号鉢に植え付け、戸外管理とした。

球根を植え付けた鉢は平均最低気温が21°C前後となり、対照区が開花しだした9月24日に戸外栽培から無加温の温床内に移した。鉢は温床内に縁まで埋め込み、鉢内の温度の急激な変化

を防いだ。鉢内温度は最低16°C、最高32°Cであった。

結果及び考察

無処理区の開花は自然のものと同じく9月23日に開花が見られた。7週間5°Cに遇わせたのち、8月5日に低温処理を打ち切った第1区において、10月9日に始めて花芽が地上部に現われ、10月27日には10球中5球から8本の花茎が立ち開花した。開花時の平均花茎長は40cmであった。8週間5°Cに遇わせたのち8月12日に低温処理を打ち切った第2区においては、11月9日に開花し、10球から花茎が立ち、花立ち率は100%であった。同様に、処理期間を1週間ずつ加えた各区においての開花日は、第3区11月22日、第4区12月3日、第5区12月15日、第6区1月5日であった。第3区から6区までの花立ち率はいずれも70%であった。

以上の結果から夏期に掘り上げたヒガンバナ球根を低温処理することにより、目的の時期にいつでも開花させることができ、12月に実施する草花遊び展に展示することも可能となった。その場合、6月20日頃球根を掘り上げ、ただちに5°Cの低温室に9週間から11週間貯蔵し、処理終了後は平均20°Cで管理すればよいことがわかった。

〈参考文献〉

森 源治郎：ヒガンバナの開花周性・新花卉 75 昭和47年

ヒガンバナ球根の低温処理による開花調節結果

	低温処理		開花日	処理打切日から開花までの日数	開花率	出現花茎本数	平均花茎長
	開始日	打切日(週数)					
対照区	6. 19 ^日	6. 19(0)	9. 23 ^日	97 ^日	100%	25 ^本	40 ^{cm}
第1区	6. 19	8. 5(7)	10. 27	84	50	8	40
2	6. 19	8. 12(8)	11. 7	90	100	16	34
3	6. 19	8. 19(9)	11. 22	96	70	21	35
4	6. 19	8. 26(10)	12. 3	100	70	14	31
5	6. 19	9. 2(11)	12. 15	105	70	13	33
6	6. 19	9. 9(12)	1. 5	119	70	8	27



第4区の開花状態
(12月3日)